

大妻女大短大 ○高部啓子 大妻女大家政 野宮千照

目的：他国に類を見ない速さで、高齢社会へと進みつつあるわが国では、高齢者が快適に生活できるための生活支援施策がいたるところで求められている。衣の分野においてその研究はまだ緒についたばかりである。本研究では、大正・昭和・平成の時代を通して、着物から洋服へ、手作り服から既製服へと衣生活の大きな変化を体験してきた高齢者が、現在、衣服に対してどのような意識を持ち、選択や購入をしているのか、その実態を若年者との比較において明らかにし、今後の生活支援施策の基礎的資料を得ることを目的とした。

資料及び方法：資料は、平成6年10～11月に、東京都市部在住の65歳以上の高齢女子442名（平均年齢74.2歳）、比較集団として東京都及び近県在住の若年女子403名（平均年齢20.0歳）を対象とした質問紙法によるアンケート調査である。質問項目は、服装の好み、よく着る衣服の形や色柄、購入時のポイント、価格、購入期間や既製服に対する不満などである。これらの回答結果に単純集計、クロス集計、 X^2 検定を行い検討した。

結果：①服装の好みは、高齢女子では飾りの無いもの、落ち着いたもの、年相応のものに回答が集中し変化が少ないのに対し、若年女子では多様である。②よく着る衣服はブラウス、セーター・カーディガン、パンツであり、若者の好むTシャツの類は着ない。③よく着る衣服の色柄は、高齢女子の方が若年女子より多様である。④購入時のポイントでは若年女子で、色・柄・デザインに回答が集中するのに対し、高齢女子では着脱など衣服の機能性を重視している。⑤既製服に対する不満は、高齢女子ではサイズの合うものが少ない、デザインの種類が少ない、着脱に便利なデザインが少ないのに対し、若年女子では価格が高いがトップである。